

# 共創と共生 天然知能で読み解く「共生学宣言」

郡司 ペギオ 幸夫\*

早稲田大学 基幹理工学部

## Co-creation and Co-existence Analyzing “Kyosei Studies Manifesto” by Natural Born Intelligence

Yukio Pegio Gunji\*

School of Fundamental Science and Engineering, Waseda University

\* Corresponding Author: yukio@waseda.jp

### 概要

「共生学宣言」は、共創と密接な関係にある共生を、様々な領域の専門家が論じるアンソロジーである。本稿では共創の核に、天然知能的構造、特に内在するトラウマの構造が認められることを論じた後、それが共生の現場に広く認められることを、共生学宣言で論じられる具体例の中に見出していく。それによって共にトラウマを内在する意味で共通点を持つ共創と共生が、共創学は「創る」に焦点を当て、共生学は「異質なものと共存」に焦点を当てている点で異なることを示し、両者の相互依存性を明らかにする。

### キーワード

共創, 共生, 天然知能, トラウマ, アンチノミー

### Abstract

“Kyosei Studies Manifesto” is an anthology in which experts in various fields discuss co-existence, which is closely related to co-creation. In this paper, I show that the core of co-creation can be expressed as Natural Born Intelligence, especially the underlying traumatic structure. After that, I find in the concrete examples discussed in the anthology, Kyosei Studies Manifesto, that such a structure is widely recognized in the field of co-existence. Finally, I show that while co-creation and co-existence have common structure, they also differ from each other in the sense that the Cocreationology focuses on “creating” and Kyosei studies focuses on “co-existence with foreign things”, and clarifies the interdependence between the two.

### Keywords

Co-creation, Co-existence, Natural Born Intelligence, Trauma, Antinomy

## 1 はじめに

著者は、共生学会立ち上げのために刊行された「共生学宣言」[志水ら 2020]の合評会で、その内容にコメントを求められ議論したことで、共生学が問題にしていることを自分なりに理解した。「共生学宣言」では、共生学が学としての形を取るための方法論にまで言及しているが、多くの論考はそれに則ってはならず、一見統一感のない印象さえある。しかし、様々な共生論を天然知能的構造[郡司 2019a; 2020b]に従って読み解く時、そこには共通の問題意識が認められ、共創学との関係が明

らかとなり、共創学にとって極めて有益な論点が見出される。

本稿で問題にする共生学は飽くまで、共生学宣言で問題にされている共生学である。しかしながら共生学宣言の1章にあるように、それは従来の共生学の知見を十分参照した上で、現代に生きる我々にとって構想された共生学であり、その限りで一般性を失うものではないと考えられる。

共創という概念自体、未だ共創学会員においても統

一見解があるわけではない。「共に」という論点を感覚の共有に求めるか、求めないかにおいて、共創の意味は大きく変わる。ただし共創のいくつかの議論[郡司 2019b; 中村・郡司 2018; 2020b; 三輪 2019; 西 2019; 諏訪 2016; 中村 2019]には、確実に共通点がある。それは天然知能的構造であり、そこに潜むトラウマの構造である。そしてその構造こそ、様々な共生の局面に見出されるものなのである。

そこで本項では、天然知能的構造を概観した後、いくつかの共創の場面に明らかにそれが見出されることを示した後、「共生学宣言」で論じられる共生の局面にもまた、天然知能的構造由来のトラウマ的構造が認められることを示す。これらを通して、そのトラウマ的構造こそ、異質なものととの共存にとって本質的な構造であることが明らかとなる。ここから逆に、トラウマ的構造を認める共創は、異質な者との創造を捉えており、だからこそ新しいものを創造する共創となっていることが理解される。

## 2 天然知能に内在する A/B トラウマ

### 2.1 人工知能的理解と天然知能的理解

郡司[2019a]は、措定された二つの概念 A, B の間を構造化・関係化することを理解とする理解のあり方を人工知能的理解とし、これと対比的に、理解が同時に創造でもあるような理解のあり方を天然知能的理解とした (Fig. 1)。人工知能的理解では、二つの概念が関係付けられる際、当初 A, B を措定する際の想定外部は、最終的に関与しない。天然知能的理解では、A, B を接続しようとしながら同時に切断する運動が進行し、ここに想定的外部がやってくる[郡司 2020b]ことで、理解が創造たり得る。ここで重要な点は、接続し同時に切る Fig. 1 中の A/B トラウマである。それは内在する肯定的かつ否定的アンチノミーという形をとる。

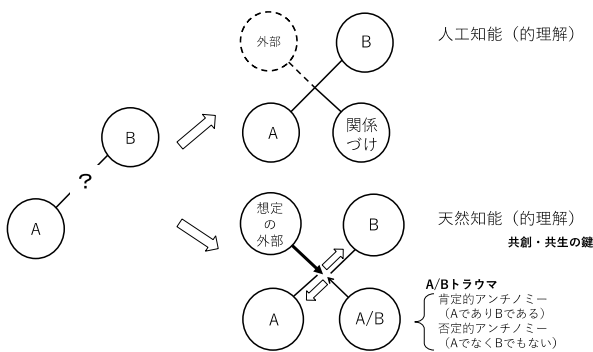


Fig. 1 人工知能的理解と天然知能的理解.

アンチノミーは二つの概念の矛盾を意味するが、2

種類あり、A, B が共に成立するものを肯定的アンチノミー、共に成り立たないものを否定的アンチノミーという。A/B トラウマは、それを同時に満たす。ここでは戦場体験や虐待によって生じるトラウマ[ヴァン・デア・コーク 2016; 宮地 2020]に加害・被害に関する肯定・否定的アンチノミーが典型的に認められる理由から、この構造をトラウマと呼ぶ。

トラウマとあえて呼ぶ理由について詳述しよう。第一に肯定的アンチノミーの側面をトラウマが持つ点について述べよう。ここで問題にしているのは症状として現れる加害・被害の相互反転性ではない。その両義性はたまたま現れるのではなく、トラウマにおいて原理的なものと考えられるからだ。戦場体験では実際、被害と加害が共存し、両者が分かれ難く結びついている。津波被害者のような端的な被害者の場合、生き延びてしまったという感覚が加害者意識をもたらすと言われる。しかし、そのような具体的な意識を持たなくとも、加害意識が被害意識に内在するのではないだろうか。あまりの理不尽さ故に、具体的な加害者を指定することが、本人にとって意味を持たなくなってしまうからだ (自然が加害者だということが意味を持たないように)。つまり、加害・被害の二項対立が無効にされる意味で、「被害」を指定するメタレベルの指定が「被害」に内在してしまう。メタレベルの指定を論理的に解釈しようとすると、被害・加害の両義性が顕在化するが、実際には両者は不分明な形で混在している。無意識に潜むトラウマの加害・被害の共存は、その意味で肯定的アンチノミー (矛盾) を担っていると考えられる。

肯定的アンチノミーとしての存在様式は、他の呼称を用いるなら量子力学で使われる「もつれ (エンタングルメント)」も有効だろう (例えば, Gunji & Nakamura [2020], Nakamura & Gunji [2020])。しかし以下に示す否定的アンチノミーとの関係から、ここではトラウマと呼ぶことが最も適切と考える。

トラウマという用語を用いる第二の理由は、否定的アンチノミーの潜在性である。宮地[2020]はトラウマとは何かを論じて、明確に回復を論じるものではない。この姿勢はトラウマのモデルでもある、自身が提案する環状島を (トラウマからの回復として) どう変形するか、という対談における議論でも言及される (宮地 [2021])。またヴァン・デア・コーク[2016]はトラウマにおける非論理的な加害・被害の混在を認めながら、その回復を情動に訴える様々な方法で網羅的に論じ、それを普遍化しようとはしない。これに対し本項では、実はトラウマの回復とは肯定的「加害/被害」アンチノミーにおいて構造は担保したまま、その強度を脱色するこ

とではないかと考えている。それはまさに否定的アンチノミーを意味し、トラウマの回復に向けて、むしろトラウマ自体に潜在していると考えられる。トラウマの構造が変わることなく変化（回復）を示唆する宮地[2021]の議論にも通じるものだろう。この意味で、トラウマは否定的アンチノミーを潜在するのである。

この A/B トラウマが A, B の間を接続すると同時に切断する。接続の意図によって、引力を孕む切断で拓かれる空白域[アガンベン 2005]が A, B の間に開かれ、そこに外部が召喚される。

創造とは何かに関する論点だが、従来の創造論と天然知能では大きく異なっている。例えば Boden[1998; 2004] は創造性を、探索、組み合わせ、変形の三つに分類しているが、前者二つは質的变化を伴わず、後者のみが相転移のような質的变化を有すると述べる。しかしそれは結果における分類に過ぎず、例え組み合わせであっても、異質な二者を何らかの形で化学反応させ創造につなげる前提・状況の整備、創出(創造の方法[久米 2000])を選択する限り、質的变化は現れる。つまり創造とは何かは、この前提の選択・準備をその本質とするわけだが、Boden の議論はこれを見落としている。それは、変形をもたらす前提の準備は自明として隠蔽することだ[養老 2020]。それが自明であるなら、創造は人工知能において容易に可能となり人間の脅威となる[ソートイ 2020]。

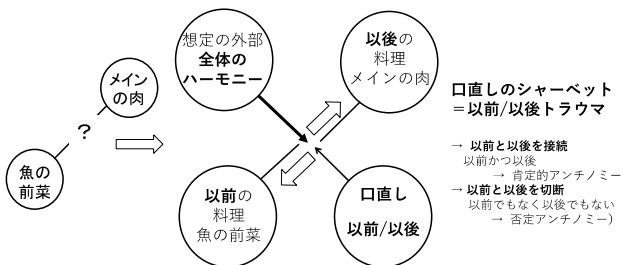


Fig. 2 内在するアンチノミーの例：口直し。

天然知能的理解で鍵となるものが、A/B トラウマである。中村・郡司[2018]において、示されたコース料理の「口直し」が、A/B トラウマの典型的事例となる(Fig. 2)。A を事前 (の料理) -例えば、魚を使った前菜-とし、B を事後 (の料理) -例えば、ステーキのような主菜-とする。ここで口直しとは、以前の料理の後口をすっかり忘れさせ、次の料理を迎え入れる準備をするものだ。それは極力甘みを抑えた、スプーンに載せられたシャーベットのようなものかもしれない。それは以前と以後を切断することで、両者のいずれでもない否定的アンチノミーであり、以前と以後を接続する意味で、両者を

共に肯定する肯定的アンチノミーなのである。

肯定的アンチノミーと否定的アンチノミーは、論理的に同時に成り立つことなどできないだろう。しかし天然知能が問題にする知性、論理は、現実には接している知性であり論理である。従って知性・論理を実行する条件は不安定で、微細な環境・文脈の変化の影響を受けてしまう。この微細な環境・文脈の違いによって、一方で肯定的アンチノミー、他方で否定的アンチノミーを成り立たせる。

「以前/以後」トラウマである「口直し」は、接続し切断することで、両者の間を通して、料理全体のハーモニーといったある種の全体性を召喚する。それは、単に以前の料理と以後の料理を順次並べ立てるだけのコース料理では窺い知ることもできない想定的外部なのである。もちろん外部とは常に相対的なものだ。ここで問題にしているのは、口直しという料理が発明される以前の状況で、外部を捉えることである。この状況では、料理全体のハーモニーを感じることは、外部へ接続することだ。しかし今となっては、もちろん、全体のハーモニーを素朴に全肯定するわけでもない。

## 2.2 共創に見出される A/B トラウマ

郡司[2019b]の共創は、最初から天然知能の図式において構想され、A/B トラウマを内在させている。A を理論、B を実践とすると、A/B トラウマとは肯定的・否定的理論/実践アンチノミーを意味する。中村・郡司[2018, 2020]の論じる創造性は、Duchamp[1956]が唱える創造性を深化させ、A を制作意図、B を制作実践とした天然知能的構造に整合的であることが主張されている。

特に中村・郡司[2018, 2020]および Nakamura[2021]では、日本画の琳派に見られる板状に描かれた山並みを、舞台背景画に因んで「書き割り」と呼び、ここに「近景/遠景」トラウマを見出している。一枚板状の「書き割り」は、近景である裾野と遠景である山頂を共に含む意味で肯定的アンチノミーである。同時に「書き割り」は視界の限界を示しながら、その向こう側が、こちら側と同様に世界が広がっているとは言えない意味で、近景も遠景も否定し、我々の世界の外部を示唆している。だから、「書き割り」は否定的アンチノミーをも成立させ、「近景/遠景」トラウマを成立させている。

肯定的アンチノミーと、A と B とを関係づける人工知能とは、同一視される危険性もあるだろう。A, B の土台を提供することで両者を共に認める人工知能は、A, B を共に肯定し、肯定的アンチノミーを提供しているようにも思えるからだ。しかし、そうではない。その違いは、書き割りと透視図法を比較すれば明らかだ。

郡司[2020a]は透視図における消失点を無限まで見渡

す超越者の視点としているが、Nakamura[2021]はこれを書き割りとは対比することで、よりその意味を明確にしている。すなわち「書き割り」は、本来同居してはいけない近景と遠景を、一枚の板に描いてしまう故にアンチノミー（矛盾）を意味する。他方、透視図は、無限遠を意味する消失点と距離概念の導入によって、近景と遠景の置かれる場所を区別することで、共存を排除し、矛盾を排除している。それは近景と遠景を矛盾なく区別する約束事の導入であって、矛盾そのものを許容することではない。この約束事を決めることこそが、前述の人工知能の定義における「関係づけ」なのである。

「書き割り」では肯定的アンチノミーが成立するからこそ、近景・遠景の意味が無効にされることで、否定的アンチノミーが現れる。これに対して、透視図において近景・遠景が意味を失う地点とは、まさに無限遠を意味する消失点である。「近景/遠景」アンチノミーは、矛盾を意味する故に、近景や遠景を指定する認識空間を突き破り、その外部へと接続する。対して透視図は、肯定的アンチノミーさえ実装せず、矛盾を取り込むことはない。消失点は、認識空間を突き破るところか、極限として認識空間に取り込まれてしまう。以上の考察から、肯定的「近景/遠景」アンチノミーと、近景・遠景の両者を距離概念によって「関係付ける」透視図＝人工知能の見取り図、とは明らかに異なり、前者における近景・遠景の無効化が、認識の外部を召喚するのに対し、後者における近景・遠景の無効化が、それ（消失点）を極限として認識の内部に取り込むことは明らかだろう。

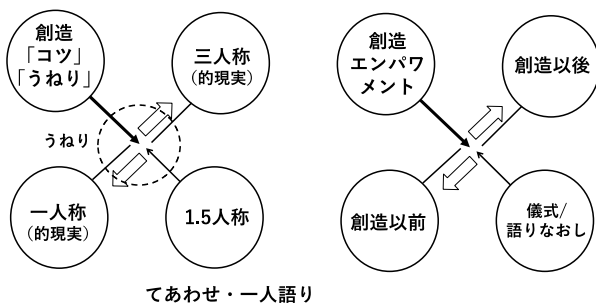


Fig. 3 共創における天然知能的構造.

では共創学として論じられる他の事例はどうか。それらはもちろん天然知能と独立に発展したものだが、多くの研究が天然知能的構造を有している。それを簡単に見ていくことにする。三輪[2019]と西[2019]は西が発案した「てあわせ」という身体表現を共創のモデルとしている[西・三輪 2016]。それは二人の人間が手を合わせながら心身の能動と受動を交錯させ、即興的に創りあげる表現であるが、当事者的視点（一人称）と俯瞰し

た視点（三人称）を同時に認めながらも、そのいずれでもない脱色された境地（空白域）が形成され、結果的に現れる二人の運動の反復から変調、波の「うねり」のような現象（三輪[2019]によって詳細に解析されている）が現れる。ただし西[2019]において二項対立的一人称と三人称は、一人称的現実感(Actuality)と三人称的現実感(Reality)や珠と布などのイメージに変奏され、それらを接続しようとしてできない間に現れる潜在性の発露＝空白域をも、西はうねりと呼んでいる（波における物理的うねりと区別される）。この意味で潜在性＝うねりを創り出す「てあわせ」は、「一人称/三人称」トラウマを成し、天然知能的構造をもたらししていると考えられる(Fig. 3 左図)。郡司[2019a]は、「一人称/三人称」トラウマを1.5人称と呼んでいるが、「てあわせ」はその意味で1.5人称に相当するものと考えられる。

諏訪[2016]では、一人語りという形で明確に1.5人称が実装される。多くの場合一人称と三人称の対立は、研究者、とりわけ、当事者として研究対象である共同体に入り、それを三人称的に記録する文化人類学者を、悩ませてきた。しかし諏訪は、オノマトペさえ多用する徹底した主観的一人語りを被験者にとらせる。被験者は毎日ボーリングの練習をし、毎日一人語りでも練習を反省する。これを続けると、或る時、突然ボーリングのコツを掴み技量が飛躍的に上がるという。一人語りは当事者の言語記録という意味で、肯定的「一人称/三人称」アンチノミーであるが、内的な当事者でなく、客観性を担保しない意味で純粋な三人称ではない。その意味で否定的「一人称/三人称」アンチノミーでもあり、故に「一人称/三人称」トラウマを成している。だからこそ、一人称と三人称の間を穿ち、「コツ」がやってくるのだと考えられる(Fig. 3 左図)。

中村[2019]は参加型の芸術活動における、創造とエンパワメントがやってくる、或る種の条件について論じている。それは創造以前に創出を準備する儀式と創造以後の語り直しの対であるという。この密接な対は、対自体として「創造以前/創造以後」トラウマを構成している。第一に両者を共に満たすことは明らかであり（肯定的アンチノミー）、第二に両者が相互浸透し分離できないが故に、純粋な意味での創造以前、創造以後は共に存在しない（否定的アンチノミー）からだ。この「創造以前/創造以後」トラウマ（＝「儀式/語り直し」トラウマ）がFig. 2における口直しの正確な相似形である点に注意せよ。ただし中村[2019]における以前・以後は通時的時間の中の現象ではなく、共時的構造の中での創造に内在する創造以前・創造以後と考えるべきだろう。芸術的創造の中で、儀式は反復的に織り込まれ、語り直しは予期されるわけだ(Fig. 3 右図)。

中村・郡司[2018, 2020b], 西[2019], 三輪[2019], 諏訪[2016], 中村[2019]はいずれも表現を問題にしており, 豊かな表現がやってくる状況, 創造が体験される状況を論じている. 本稿では, それらがまさに天然知能的構造を有し, その核である A/B ト라우マを内在していることが示された.

同じく共創学の中でも永田[2019]は明示的にトラウマ的構造を論じていないが, 協同や協調関係が, 想定される範囲で可能であるのに対し, 共創には外部が必要であると論じている. 植野[2019]は, 日本語に特徴的な共話を分析し, そこに相互予期を見出し, これを可能とする共創の場を仮定する. しかし, そのような仮定はいろいろなかもしれない. 相手の問いかけに対して絶えず正しい答えを予測するような対話なら, 予測が成功し続けることは謎となる. しかし予期は予測と異なり, 答えを予測しながら問いを事後において変えてしまう [Gunji et al. 2011; 2018; 2020; 2021, Murakami et al. 2014; 2017]. だから, 結果的にうまく答えられたかのような対話=共話が成立する. 問いと答えの相互変質は, 天然知能図式における A=問い, B=答え, において成立する. 「答え/問い」トラウマによって, まさに共話的コミュニケーションは実現可能となる. 郡司[2020b]では, パトカーの写真を見せられ「これ何だ」と問いかけられた時, 「カブトムシ」という答えが, 新たなコミュニケーション (特殊な共話) を開いたと報告している. 「カブトムシ」こそ「答え/問い」トラウマを成すものである.

### 3 「共生学宣言」における A/B ト라우マ

#### 3.1 共生学が警戒感を持つもの

共創学において天然知能的構造およびそこに内在する A/B ト라우マの意義が認められる. 共生の現場においてはどうか. 以下, 「共生学宣言」の内容について A/B ト라우マの観点から解説しよう.

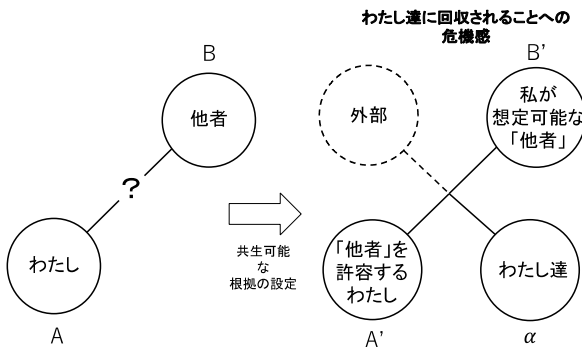


Fig. 4 「わたし達」による共生根拠への警戒感.

序章において編者の中心メンバーである志水[2020]

が共生学を定義し, 学としての共生学を規定する. それは多数派を A, 少数派を B とするとき,

$$A + B \rightarrow A' + B' + \alpha$$

となるような, 新たな制度  $\alpha$  の創発を伴う共進化的イメージを共生に与えている. ただしこれだけでは Fig. 4 のような共生モデルにも合致してしまう (それは後述するように誤解ではある). それは共生の根拠を「わたし達」に求め, 「わたし達」において「関係づけ」を実現するモデルである.

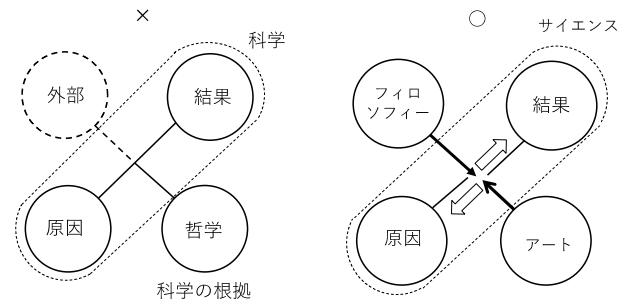


Fig. 5 既存の科学・哲学関係と共生学で想定されるサイエンス, アートとフィロソフィーの関係.

しかし「共生学宣言」の2章では檜垣[2020]が8章では稲場[2020]が大きな物語や共創の場といった「わたし達」への警戒感を示している. このことに整合的に, 序章の後半, 志水は, 共生の目的を明示するフィロソフィー, 共生に向けて現実を理解するサイエンス, 共生の手立てとしてのアートの関係を提言する. 通常科学は因果関係を現象の説明として求め, 哲学はそれを根拠づけるものと構想されるだろう (Fig. 5 左図). ここに藝術の関与はない. ところが志水は, 因果律の論理的決定を補完する機能に情緒や感覚に基礎づけられたアートを見出し, サイエンスと共生を関与づける. 郡司[2019]は Fig. 1 人工知能図式における A, B および関係づけに質料因, 形相因, 作用因を対応づけ, この三つ組が機械論に対応し, 目的論はその外部へ排除されることで機械論 vs 因果論の対立がもたらされると説いた. 脱機械論的生命論は, 機械論に目的論 (外部) を組み込む形で天然知能図式とならざるを得ない. 志水の議論はこれに対応可能で, 因果関係を接続・切断するアートは「因果」トラウマ, 目的 (因) に対応するフィロソフィーは外部に相当すると考えられる (Fig. 5 右図). すなわち志水[2020]は, 共生の基本理念が天然知能に整合的であることを示している.

このことは, 自らの認識世界外部と接続しようとするあらゆる実践=理論が, 天然知能の形をとることを意味しているのであり, 天然知能の形を満たすものと

満たさないものがあるわけではない。

### 3.2 カタルシス・フラストレーション・A/B トラウマ

2章で檜垣[2020]は、共生のパイオニアである花崎に言及し、政治運動が大きな物語に絡め取られることで、いずれ衰退する一過性のものであることを説く。その上で、共生のような本質的にミクロな営為が、大きな運動として立ち上がる可能性を考察している。

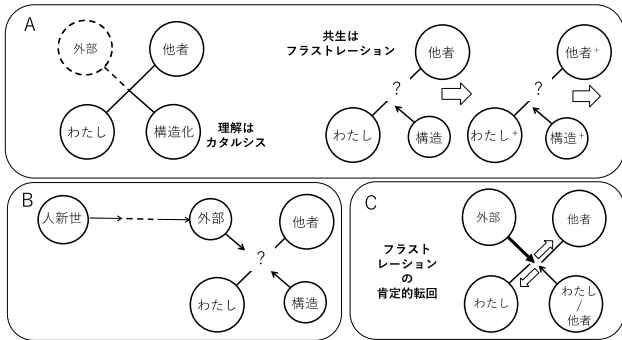


Fig. 6 A. カタルシスとしての理解とフラストレーションとしての共生. B. 戦略的人新世の意味. C. フラストレーションの肯定的転回としての天然知能.

ミクロな営為としての共生は、上野千鶴子の言葉「理解はカタルシス、共生はフラストレーション」を引くことで簡潔にまとめられる(Fig. 6A)。他者に対する理解がカタルシスであるとは、理解するわたしとされる他者が何らかの構造によって関係付けられることを理解とし、構造の発見＝構成によって理解の過程が完了することを意味する。ここに当初想定されたわたしと他者の外部は一切関与しない。これに対して「共生がフラストレーションである」は、わたしと他者の関係を構造化しようとしてそれが決してできない、もしくは、してはいけないことによって、わたしと他者の関係が不断に問われ続けることを意味する(Fig. 6A)。

このように異質な二者関係を変更し、端的な二項対立に陥らないよう、いわば保留し続ける営為は、デリダ[2003]によって検討されている(デリダにおける友敵関係の脱構築は西島[2020]が論じている)が、檜垣は構造の脱構築という点に言及していない。ただし檜垣は、構造を脅かす外部を啓蒙するため、人新世[ボヌイユ・フレンズ 2018]を取り上げる。それは人間の産業活動に起因する温暖化のみならず、様々な原因で、いずれ人類が消滅する未来を喚起し、そこから現在への補助線上に、現状の少し先・少し外にある外部を啓蒙・構想する手段と考えられる(Fig. 6B)。フラストレーションと近接する外部から構想される見取り図は、外部を積極的に召喚する、他者とわたしの間を接続しようとして切断

する「わたし/他者」トラウマではないだろうか(Fig. 6C)。それは天然知能が典型的に内包する接続・切断の装置である。

### 3.3 特殊な共同体に見出される A/B トラウマの普遍性

1章で栗本[2020]はケニア北東部のトゥルカナという牧畜民を取り上げ、トゥルカナの「ナキナイ(～をくれというトゥルカナ語)」の意義を論じている。日本人がそれに接する際の、違和感や不快感を強調しているが、これは2章の檜垣が言及する「共生はフラストレーション」に繋がる議論である。

ただし、ナキナイを許容する文化と許容しない文化の共生がテーマなのかというところではない。誇り高いトゥルカナにおいて、しかし自助努力ではなく相互にナキナイを許容することが、生きさえ脅かす予測不能な状況に対処する「文化～制度」なのではないかと示唆している。これは天然知能的状況を極めて強く示している。第一に、ナキナイは「受動/能動」トラウマを構成している。乞う者(受動者)と施す者(能動者)は、語義的に二項対立を示している。ここで乞う者は、受動者として施されることを待つしかない。これに対して、「ナキナイ者」は、積極的に乞うという意味で能動的受動者である[郡司 2013]。すなわち、能動者でありかつ受動者(肯定的アンチノミー)であり、非対称性を担保した制度を否定する意味で、能動者ではなく受動者でもない(否定的アンチノミー)。したがって「ナキナイ者」は、明確に「受動/能動」トラウマを成している。つまり「ナキナイ者」は受動・能動の二項対立を接続し切断するものと考えられる。第二に、予測不能な状況とは、まさに受動・能動から構成される社会の外部であり、想定的外部である。この意味で栗本[2020]は、「受動/能動」トラウマが外部と接続し、外部を対処する、現実である事を示唆している (Fig. 7 上段)。

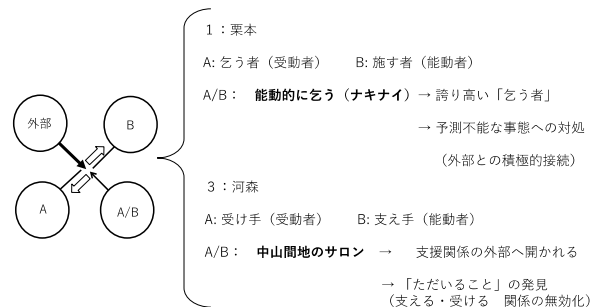


Fig. 7 共同体における A/B トラウマの普遍性. 能動的受動者としての A/B トラウマと中山間地のサロンとしての A/B トラウマ.

3章で河森[2020]は、共同体における結節点となるよ

うな支援サロンについて論じている。サロンの機能自体、サロン外部に接続し、街全体を活性化する役割を担うものだ。しかし議論の中心になるのは都市部のサロンではなく、山間地域のサロンである。都市部のサロンでは、支援する側は中・若年層であり、支援される側は高齢層である。この年齢的非対称性が、常識的な意味での支援関係を成り立たせている。対して中山間地のサロンでは、過疎化・高齢化が進むことで、支援する側に中・若年層を期待できない。支援する側もされる側も高齢層であり、場合によっては区別さえ難しい。この時、中山間地サロンは、互いに日常のことを語り合う茶飲話の場所となり、顔を合わせ、無事を確認し合う場所となる。この意味で中山間地サロンは、そこにいる一人一人が、支援する者と支援される者を同時に満たす肯定的アンチノミーとなる。

否定的アンチノミーについてはどうか。例えば、中山間地のサロンで支援する・される側の両者が高齢者であり、当初は互いに慰めあっているように見えた場合でも、支援・被支援の強度が脱色され、それでもサロンで会話する、という否定的アンチノミーが現れる場合もあるだろう。その現れ方には詳細な評価が必要になるだろうが、もしそうなれば「支援する/される」トラウマを満たすものとなるだろう(Fig. 7 下段)。

河森は、「受け手/支え手」トラウマである中山間地サロンに、肯定的意義を見出そうとしている。支援する・支援される、という常識的な関係を逸脱し、中山間地サロンは、明確な支援行為の授受で成り立つ支援制度の外部に接続し、新たな可能性を受け入れているというわけだ。それは「ただいること」に見出される幸せであり、意味や価値を見出すことだけに幸せを感じるのではない、幸福感である。そのような外部に踏み出せる装置はいかにして可能なのか。それは「受け手/支え手」トラウマによってこそ可能であると考えられる。

### 3.4 実験場における A/B トラウマの二重性

12章で編者の一人でもあるモハーチ[2020]は、日本とベトナムの、特異な薬用植物園について論じている。もちろん特異性によって一般化が困難になるのではなく、共生の普遍性をこの特異性から立ち上げることが、モハーチの目的である。そしてここでは二重の意味で A/B トラウマが発見されていると考えられる。

モハーチはまず、日本の或る薬用植物園における、管理・保全状況を紹介する。そこでは育種のための独自のテクニックが生み出されていると共に、土壌のためには、この植物の作付けが必要だ、といった独自のエコ思想さえ生まれているようだ。

薬用植物園は、通常、いかなる植物が薬として有用で、

そのため維持・管理する必要がある、といった、薬用植物園を運営する側の論理が存在するだろう。運営側の論理には、新規の植物を植えることは可能かといった質問もしくは要請も含まれるに違いない。運営される側、つまり実際に植物園を維持・管理する側は、その論理のもとで粛々と植物の保全を実現することになる。すなわち、植物園を運営する側(経営者)と運営される側(維持・管理者)の間には、一般的な意味での、科学における理論と実験の関係がある。理論家は理論によって新たな現象を予測し、そのための実験を実験家に要請する。実験家はこれを受けて実験を実施し、予測を実証するか棄却する。この限りで理論と実験は、常識的な科学哲学によって双対性を根拠づけられ、補完関係にあると言っていいだろう(Fig. 8 上段)。

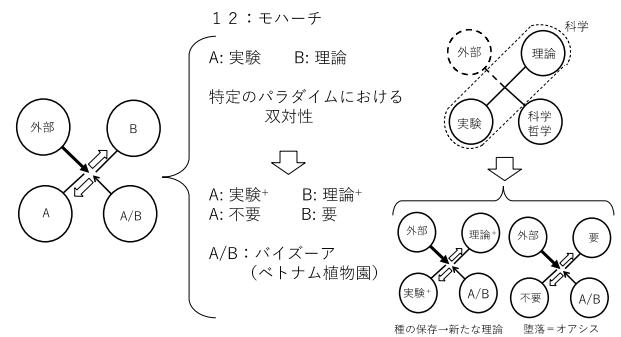


Fig. 8 薬用植物園における A/B トラウマの二重性。

しかし大きな科学の変革は、多くの場合、そういった理論と実験の補完関係を無視したところで実現される。理論家が自明と思い、意味を見出さなかった現象を実験家はわざわざ取り上げ、それが突破口となって大きな変革がもたらされる。モハーチが示唆する薬用植物園は、まさにそのような、理論と実験の関係を脱構築する装置として働いている。薬用植物園は、理論と実験を共に満たす意味で肯定的アンチノミーであり、整備された理論から実験をデザインする論理性や無矛盾性が担保されない意味で、通常の理論や実験が成り立たず、否定的アンチノミーになっている。つまり薬用植物園は、「実験/理論」トラウマを成している。

モハーチはベトナムの植物園、バイズーアについても言及する。それは市街地の河川の中州に位置し、富裕層を含む一般市民にとって不要な場所、忌み嫌われる場所である。その場所において、富裕層が必要とする薬用植物が栽培される。モハーチの強調するバイズーアのギャップは、「不要/要」トラウマの有する、肯定的アンチノミーと否定的アンチノミーのギャップである。要・不要の二項対立に則りながら(要・不要を共に肯定) 要・不要の間に穴を穿つ(要・不要を共に否定) ギャップ

プこそが、実は要・不要という素朴な二項対立の外部へ出る装置なのである(Fig. 8 下段).

以上の意味でモハーチは、明確には強調しないものの、特異な薬用植物園が、「実験/理論」トラウマ、「不要/要」トラウマの二重性を担うことを示唆し、そこにおいてこそ、新たな可能性＝外部へ接続する共生の鍵を見出していると考えられる。

### 3.5 公共財の A/B トラウマ

ここでは、7章と8章で論じられる学校や宗教施設における A/B トラウマの議論をみていこう。澤村[2020]は7章で、ケニアにおけるスラムの無認可私立学校の意義を論じている(Fig. 9 上段)。なぜ共生の論考で無認可私立校の運営状態を論ずるのか。これも一見判然としないが、A/B トラウマという観点で読み直すなら明快である(Fig. 9 上段)。

ケニアに多く存在する私立無認可校は、公立校の不足を補い、未就学児童の救済に大いに寄与しているという。ところが多くの場合、そのような学校を運営する者は十分な資金を持たず、経営的に破綻している。

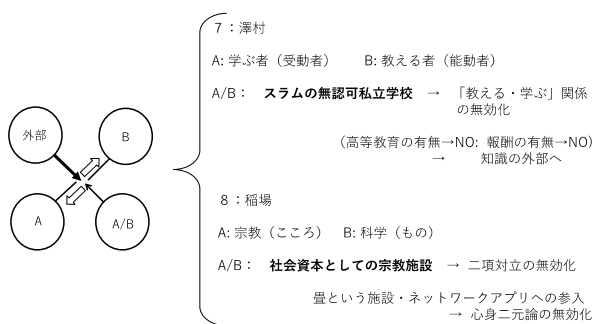


Fig. 9 公共財における A/B トラウマ。無認可私立学校と宗教施設。

にもかかわらず運営する者はそれを大して気にも止めず、雇用される教師の方もほとんど無給で、熱心に教育をするということだった。教える(能動者)・学ぶ(受動者)の間には、通常、大きな非対称性がある。大学卒業資格など、高等教育を受けた者が教師であり、受けていない者が生徒である。しかしケニアの無認可私立学校において、教師は日本の中学教育程度しか受けておらず、受けた教育の程度において教師と生徒の間に大差はない。つまり受けた教育に関して、この無認可私立学校は、教える・学ぶの境界を曖昧にすることで共立させ、肯定的アンチノミー足り得ている。

読者は、肯定的「教える/学ぶ」アンチノミーが、例えば大学研究室での、極めて優秀な学生と教員の関係でなければ成り立たないと考えるかもしれない。そ

のような場合、斬新なアイデアを思いついた学生が教え、教員が学ぶということもあるだろうし、学生と教員の垣根が低ければ、教え・学ぶ関係の両義性が実現されるだろう。しかし、肯定的アンチノミーは教育レベルとは独立である。ケニアの無認可私立学校では、学びながら教える教師だからこそ、子供から学ぶ姿勢も発揮されるからだ。

教える・学ぶの非対称性は、通常、給与の有無によっても根拠づけられる。しかし前述のように、ケニアの無認可私立学校では、教師はほとんど無給の状態である。できる限りきちんとした教育をしようと努力している。つまり給与の有無に関しても、教師と生徒の間に非対称性はなく、給与の有無によって明確に意識される、教える・学ぶ関係は無効にされる。この意味において、ケニアの無認可私立学校では、否定的「教える/学ぶ」アンチノミーが成立する。教師は報酬をもらい、生徒はそれを支払う、という非対称性は、教育に、「有用な何かを伝達するサービスである」というイメージを強く植え付ける。ところが教える・学ぶ関係では、伝達される何かについて共通の土台など存在せず(柄谷[1992])、それは言葉のやり取りにおいてさえ、暗闇の中の跳躍を伴うものなのである(クリプキ[1983])。例えばヘレン・ケラーが手に水をかけられ、手の表面に water と指で書かれ知ったことは、水と water の対応関係ではなく、全てのものには名前がある、ということだった。すなわち、教える者、学ぶ者の間は、否定的アンチノミーによって切り開かれ、メタ認知を召喚するように外部を召喚するのである。

この意味でケニアの無認可私立学校は、肯定的アンチノミーと否定的アンチノミーを共に成立させており、「学ぶ/教える」トラウマを成立させていると言えるだろう(Fig. 9 上段)。それはヘレン・ケラーが言語のメタ認知に開かれたように、むしろ素朴な知識の授受の外部に開かれ、生徒の自主性を促す教育となることさえ可能だろう。

稲場[2020]は8章で、被災地における宗教施設の意味を論じている。Fig. 9 下段に示すように、宗教施設自体が、こころの問題であるところの宗教と、もの問題である建築施設を両義的に満たす意味で、肯定的「こころ/もの」アンチノミーである。稲場は宗教を仏教に限定しないが、檀家や豊敷きの記述もあり、仏教系寺院を対象にしているようだ。肯定的「こころ/もの」アンチノミーは、宗教施設という具体的場所が、利他主義(思いやり)の契機となるという稲場の主要論点と考えられる。さらに「もの」は科学へと拡張され、宗教施設が独立電源装置を完備し、災害時緊急被災地情報などの災



害対策アプリに組み込まれることが構想される。これは肯定的アンチノミーの強化を意味するものである。

現実の周囲を見るなら、仏教は世俗化し、真にこころの問題としての宗教がどのように問われているのか、疑問を感じる読者も多いだろう。しかし稲場は過剰な理念化を避けた現状をむしろ肯定的に捉えていると考えられる。宗教と科学の両義性を徹底させる時、肯定的「こころ/もの」アンチノミーは、解決すべき問題とみなされるだろう。最終的にその問題は、宗教を科学で根拠づけ、科学を宗教で根拠づけることによって、解決されることを宿命づけられる。そのような解決志向は、科学と宗教が論理で媒介されることで根拠づけられる。これを退ける時、論理で理解する科学、そうではない宗教、の両者は、通訳不可能な二元論を成すだろう。稲場は論理による宗教と科学の媒介（同化）とも、論理の有無による差別化とも異なる場所で、宗教と科学の共立を捉え直そうとしているようにもみえる。それは宗教施設に否定的「こころ/もの」アンチノミーさえ見出すことを意味し、この限りでそれは、「こころ/もの」トラウマを成している。

### 3.6 性にまつわる A/B トラウマ

5章と6章では性被害の問題と性教育の問題が取り上げられる。いずれも、対立を超えて問題を焦点化することで A/B トラウマの存在が明らかとされる。

5章で藤目[2020]が論じるのは、性暴力被害者がその被害をスピークアウトすることの困難さである。性暴力に関する被害・加害の関係は明らかであっても、それを明文化することは、何らかの文脈を固定して初めて可能となる。そのため文脈によっては、逆に明確な被害・加害関係がなかったことにされる可能性さえある。また何らかの文脈で被害・加害関係が構造化されることから、被害者自身が被害・加害の反転を憂慮して口を閉ざすことさえ起こり得るという。例えば、被害者の告白が被害者自身の家族を傷つけると、被害者が考えてしまうように(Fig. 10. 上段中央図)。

藤目は、いかにポリティカル・コレクトネスを考慮し、慎重に対応しても、被害者の告白を困難にする状況が存在すると論じ、これに抗して、いかにして、被害をスピークアウトすることが重要かを説いている。ここには第一に肯定的「被害/加害」アンチノミーが認められる。それは表面的には、加害・被害関係を明らかにすることで加害・被害の反転可能性が認められ、被害者であり加害者であることの共立が可能に見出される状況に思える。しかし、加害・被害の反転可能性は、加害・被害関係の文脈、条件を明らかにされた後、たまたま実現されたのではなく、むしろ肯定的「被害/加害」アン

チノミーが露わになったことで表出したと考えた方がいいだろう。肯定的アンチノミーこそが、先行的に潜在している。何れにせよ、ここで思考停止する限り、被害・加害は徹底して曖昧で、その区別は無根拠である、といった議論に回収され、逆に犯罪を隠蔽し加害者に利するような議論になるだろう。

しかし、肯定的「被害/加害」アンチノミーが認められるように、文脈の複数性に目を向けるなら、文脈依存性というメタな次元が発見されるだろう。それは、被害者や加害者を指定する文脈を相対化し、加害や被害という概念の意味を脱色する場所である。津波の被害者は、決してトラウマを解消できないだろうが、その意味を脱色し、それまで決して見ることでできなかった海を、眺められるようになる。それと同じ意味で、加害・被害の強度が脱色され、被害者でも加害者でもないという否定的「被害/加害」アンチノミーが認められることになる。ここに「被害/加害」トラウマが認められる。

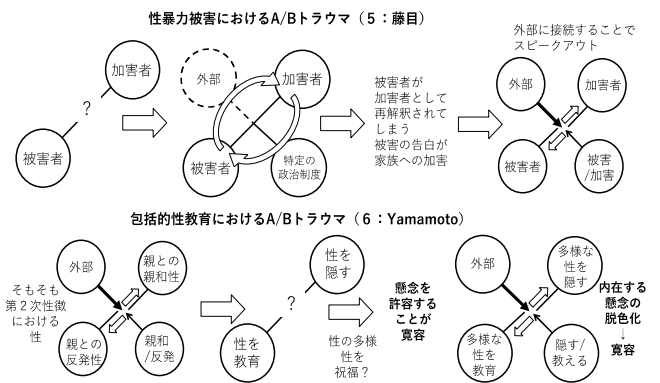


Fig. 10 性にまつわる A/B トラウマ.

肯定的「被害/加害」アンチノミーに留まるのではなく、「被害/加害」トラウマにまで到達する。こうして初めて被害者のスピークアウトが可能になると考えられる。肯定的「被害/加害」アンチノミーのみなら、両者が成立するので、いずれかを主張することはできない、と結論づけられる。加害者に一方的に利するこのような論理に抗しようとするなら、「客観的に、圧倒的に明らか被害・加害関係が存在する」といったようにドグマティックな客観主義へ回帰することになる。しかし、「被害/加害」トラウマは、アンチノミーの決定さえ特定の文脈に依存することを見通し、「Aであることを、Aでない可能性さえあることを認めてAであると決定すること」への道を拓くのである。そうして初めて、加害・被害の関係を接続しようとしてその間を開く運動が発生し、特定のコミュニティーで考えがちな、閉じた加害・被害関係の外部に接続し、スピークアウトが可能になると考えられる(Fig. 10 上段右図)。その場合、客観

的に自明とされる被害・加害関係の刑罰とは異なる、新たな罰則・贖罪意識の出現も可能となるだろう。

6章で Yamamoto[2020]が論じる包括的性教育の問題も、A/B ト라우マに本質的に関わる問題である。性教育の必要な第2次性徴に向けた時期は、子供にとって親との関係に関して葛藤する時期である。それまで親の愛情を受け、親の庇護の下にあることを喜んで受け入れてきた子供は、第2次性徴によって親の目から離れることを同時に欲することになる。それは親への親和と反発を同時に受け入れることである。ところがこの肯定的「反発/親和」アンチノミーのみに留まるなら、子供は世界との新たな関係を拓くことができず、親との関係の決定不能性の中に閉塞するだろう。すなわち、第2次性徴を乗り越えるには、肯定的アンチノミーにある自己を相対化し、文脈・状況を見比べることで否定的アンチノミーをも認めることが必要となる。かくして第2次性徴自体が、「反発/親和」トラウマを内包する問題と考えられる(Fig. 10 下段左図)。

Yamamoto が論じるのは、本来的にトラウマを内包する性の、教育の問題である。取り上げる性教育の現場は、イギリスのバーミンガムで、性を公の場で語ることをタブー視する、イスラム教徒の多く住む地域である。だからこそ、性を隠すか、教えるかという決断は、決定不能の問題となる。もちろん性を隠す・教えるの二項対立は、保守的な世界観に親和的か反発的かという問題の再現前とも言える。そのような場において、Yamamoto が取り上げる学校長は、自ら LGBT の当事者であり、LGBT を含めた性教育を進めようとする。その教育プロジェクトは、いかなる性的マイノリティーも包括するという意味で、No Outsider Project と呼ばれる。このプロジェクトは、地域住民の賛意を得られないが、多くの教育者、研究者や住民の高い評価を得ることになり、「性の多様性を祝福する」ことが標榜される。

しかし Yamamoto は、性の多様性を肯定しながらも、自身も No Outsider Project に賛同するカトリックの神父の言葉を引用し、多様性全肯定の先へと進む。その結果、性教育から現れる共生の鍵に、(性を)「隠す/教える」トラウマを見出すことになる。どういうことか。神父は「多様性を祝福できる人ばかりではない。懸念を許容することこそ、寛容である」と言うのである。懸念は性を教育することへの懸念であるが、教育の全否定ではない。教育を認めつつ、これに反する主張を認める立場が懸念である。この意味で懸念は、肯定的「隠す/教える」アンチノミーを成している。問題は、懸念を許容すること＝寛容だ。寛容は、懸念を理解しながら、同時にそれを無効にする地平へ接続する。その意味で、寛容は

肯定的アンチノミーにおける隠すこと・教えることを共に脱色し、否定的「隠す/教える」アンチノミーを構想し、「隠す/教える」トラウマを現出させることになる(Fig. 10 下段中央～右図)。そこでは、多様な性を全肯定する No Outsider Project の立場とそれに反対する立場の両者を懸念(肯定的アンチノミー)において認めながら、多様性を認めるということが、一つ一つを指定し、枚挙することではなく、未だ指定されない外部に対する感度を磨くことと知ることになる。それこそが、素朴な多様性の全肯定(多様な個物を囲いこむこと)の向こう側にある共生の鍵なのである。

### 3.7 不在における A/B ト라우マをいかに構想するか

宮前[2020] (10章) と山崎[2020](11章)が問題としているのは、不在に関する A/B ト라우マではないかと考えられる。宮前は死者という不在、山崎は消滅という不在を取り上げるという違いはあるが、いずれも死者や消滅を或る種の極限と想定し、そこから遡及的に現在の我々の立ち位置を構想しようとしている。しかし、筆者たちの構想とは裏腹に、彼らが論文中で展開する方法は、極限からの遡及的構成ではない。そのことが、逆に共生のテーマにとって寄与する論述となっている。なぜなら、極限からの遡及的構成は、消失点から遡及的に透視図を構成するようなもので、外部を持たない閉じた描像となるからだ。

「書き割り」で論じたように、透視図は、消失点(無限遠である極限)から発せられた放射線をガイドラインに、遡及的に観察者のいるこちら側から見た世界の全体を構成する。それは前述のように、消失点さえ取り込む閉じた描像だ。死や消滅を消失点として構想することこそ、この閉じた描像を意味する。対して「書き割り」は同じ絵画でありながら、認識できないが存在する(だろう)向こう側を示唆することで、外部へ開かれる。この外部に開かれた描像にこそ、共生の鍵がある。

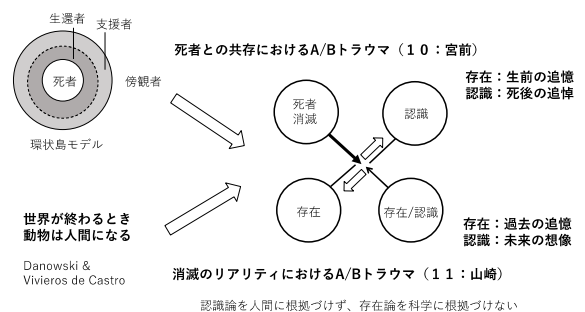


Fig. 11 不在のリアリティを召喚する「存在/認識」トラウマ。

具体的にみていこう。10章で宮前は、東日本大震災

の被災地に多く報告される幽霊譚を紹介し、幽霊の存在が、死者と向き合うこと、共同体という集合によって信じられることの二つの要素によって支えられていると論じる。第一に、向き合うことを内側に存在する死者、第二に、共同体を周囲の傍観者に置き換え、霊との共存、死者との共存を宮地[2018]の環状島モデルで解釈する(Fig. 11 上段左図)。もし死者が単に同心円の中心である点なら、この「死者との共存モデル」は極限である死者＝点から遡及的に構成される幾何学に過ぎない。しかし宮前は、死者を点ではなく大きさのある内円とした点に意義を見出そうとし、単純に話すことのできない死者が、生者によって勝手に解釈されることを回避しようとする。

宮前の議論を少し進めてみよう。大きさのある円だからこそ、死者には生前と死後が読み込める。死者の生前には故人の来歴が存在し、死後において故人の時間は止まる。死後できることは周囲の者が、故人を悼むことだけなのだ。死者にはこの意味で、生前・死後の二重性があり、両者を肯定する意味で肯定的「生前/死後」アンチノミーを有している。しかし死者のリアリティは、肯定的アンチノミーだけではもたらされない。個人的で具体的な故人の来歴は、生きていて欲しかったという激しい感情のみを惹起し、むしろ死者との共存を阻むものだから。すなわち共存される死者のリアリティのためには、故人の来歴や特別の追悼感情が脱色されている必要がある。それは否定的「生前/死後」アンチノミーを意味するものである。かくして死者のリアリティは「生前/死後」トラウマによって召喚される(Fig. 11 中央・上段右図)。

Fig. 11 中央の図において、存在・認識とあるのは、故人の生前が、故人に裏付けられることで存在し、死後は故人と独立に解釈する者において認識されるだけであることを示している。後述するように、それは認識論、存在論の二項対立を超克する具体例とも考えられる。

山崎[2020]は 11 章において、多自然主義を唱えるダウノスキとカストロの著作にあるアメリカインディアンの言葉から議論を始める(Fig. 11 下段左図)。それはまさに、人類の消滅を消失点として、この現在を構成しようとする宣言に思える。実際、「世界が終わるとき」は人新世によって根拠づけられ、消滅はそれ自体リアリティを持っていると述べられる。

しかし山崎もまた、極限からの遡及的構成を取らず、現実に消滅した山村の記録によって、普遍的消滅のリアリティを立ち上げる。それは特定の個別的山村であり、消滅した過去の村である。それを山崎は未来にやってくるであろう、消滅一般のイメージとして用いるの

である。つまり、過去の村と未来の想像によって、ここには肯定的「過去/未来」アンチノミーが認められる。しかし、過去の村によって普遍的消滅イメージを喚起するには、特定の村の来歴をできるだけ脱色する必要がある。同時に、普遍的消滅が、どこかの村の消滅でイメージされるには、任意の村の消滅に似ていることが暗黙の前提となる。したがって、その未来にあつて、特定の或る未来であることは否定されなければならない。すなわち気候変動や人新世からイメージされる或る未来であることさえない。だから、ここには否定的「過去/未来」アンチノミーが認められ、「過去/未来」トラウマが発見されることになる(Fig. 11 下段右図)。ここでの過去が特定の村の「存在」を意味し、未来を想像することが存在と独立な「認識」を意味することから、山崎の議論もまた宮前同様、「存在/認識」トラウマによって認識と存在を結び付けようとしながら切断し、その間に「不在のリアリティ」を召喚するのである。

不在を極限とみなし、ここから遡及的に「この現在」を構成するとは、不在を絶対的な実在とみなすことである。すなわち科学的言明をファクトとみなし、そこに一切の臆見や仮想が介在する余地がないと信じることである。そんなことがあるのだろうか。逆にリアリティが観測者のみに依存し、観測者の中にだけリアリティが存在する、ということもあり得ない。現実のリアリティは常に、認識論と存在論のトラウマを内在し、接続しようとする認識論と存在論の切断された空白域にこそやってくるものだと考えられる(Fig. 11 中央図)。宮前と山崎は結果的に、それを志向している。

### 3.8 実践と理論に現前する A/B トラウマ

9 章と 4 章は共生学宣言の中でも他と異なる特色がある。9 章は新潟中越地震の被災地における渥美[2020]の論考であるが、ボランティア活動のドキュメンタリーの趣を持つ。対して 4 章の木村[2020]の論考は、インドヒマラヤ地域における栄養学的考察であり、現象を説明する理論的モデルになっている。

渥美はボランティア活動の場である小千谷市塩谷集落で、当初、住民は研究者を警戒し、研究者は住民を研究対象としてのみ見ていたと告白する。具体的な復興の手立てが決まらぬまま、田植えを手伝い一緒に酒を飲む日々が過ぎることで、「研究者/住民」トラウマが成立する。それは研究者と住民の区別が曖昧となることで肯定的アンチノミーであり、研究者は住民を研究対象としてのみ見ているという、既存の研究者、住民の定義を満たさないという意味で、否定的アンチノミーになっている。こうして「研究者/住民」トラウマが醸成されてきた頃、まさに被災地に入った頃には思

いもよらなかつた(したがって外部から) 具体的復興が やって来ている(Fig. 12 上段左図).

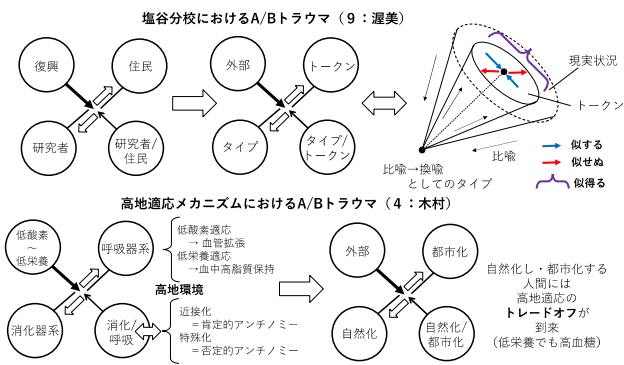


Fig. 12 ボランティアの実践と栄養学の理論に認められる A/B トラウマ

塩谷集落における具体的復興は、復興の拠点を「塩谷分校」と呼ぶことでうまく廻り始めたという。渥美はこれを比喻と呼んでいるが、タイプとトークンの混同 [Gunji et al. 2004]がその根底にあるとも言えるだろう (タイプとは原型的・抽象的記号で、トークンは個別的・具体的記号=事物)。それは復興の現場で動き始める様々な動きの全体を、「塩谷分校」で表象することから始まる。さらに、これをメトニミー [レイコフ 1993]とするような具体的イベントが構想・展開される。すなわち、塩谷分校を起点とするイベント・運動の全体が、塩谷分校と呼ばれる意味でメトニミーになっている。それは、「塩谷分校」をタイプとするような具体的事物・イベント (トークン) が現れ、それによってタイプの意味が変質し、さらに様々なトークンが現れる、という繰り返しのことによって実装されている。実際、「塩谷分校」で開かれる懇親会を「給食」と呼ぶことでトークン化し、さらにそのトークンによって具体的イメージが変質したタイプである「塩谷分校」は、学校なのだから「クラブ活動」もやろうと新たなトークンを生成する。このタイプ・トークンの不断の連鎖が、タイプ・トークンの両者を肯定し、かつ定義上両者を否定する意味で「タイプ/トークン」トラウマを実現し、それこそが、想定的外部にあった復興の実現をもたらしたと考えられる(Fig. 12 上段中央図および右図)。

渥美は塩谷分校の在り様に世阿弥[2005]の風姿花伝で論じられる美への作法を見出している。これは「タイプ/トークン」トラウマによって、現実の具体例であるトークンの空間に投影されたタイプを手本と考えるなら、手本への接近、離反が各々「似する」、「似せぬ」であり、手本を離れて自由にトークン空間を遊ぶことが「似得る」として解釈可能となる(Fig. 12 上段右図)。

木村が扱う4章の事例は、木村自身によれば「環境と

人間の共生」ということらしい。しかし天然知能の観点から考えるなら、より本質的な意味で共生の本質を突く論考であると考えられる。それは適応に、本項で述べてきたトラウマの内在が関わっているとの指摘と読めるからだ。生物の適応は、生物と環境の分離独立を前提とした試行錯誤 (自然選択) によって基礎付けられると考えられている。しかし突然変異が常に一定の比率でランダムに発生するだけでは、生物側の構造的問題に対処するには到底間に合わず、状況に依存して突然変異率が変化するような仕組みが推察されている。遺伝子配列の構造 (順序) によって突然変異率が変化するという報告もあり [Kong et al. 2012], いわば外部 (突然変異) を呼び込む仕組みが、生物に内在していると考えられる。木村の問題にする高地への適応は、そのような生物に内在する外部を呼び込む仕組みを示唆するものである。

天然知能図式に則して考えるなら、いかなる関係になっているか不分明な概念, A, Bとして, 木村が問題とするのは消化器系と呼吸器系である。両者は通常どのような関係にあるのか具体的にはわからない。しかし高地適応において、両者は強い相関を持つように顕在化する。この意味で消化器系と呼吸器系は、高地適応において接近し、共に肯定される(肯定的「消化器系/呼吸器系」アンチノミーを成す)。同時に高地で顕在化する相関を持った消化器系, 呼吸器系は、もはや平地環境の意味での消化器系, 呼吸器系の意味を失っているため、否定的「消化器系/呼吸器系」アンチノミーを成している。高地において顕在化するこの「消化器系/呼吸器系」トラウマは、すなわち平地においてすら人間に内在し、これが顕在化することで、低酸素に適応した血管拡張と低栄養に適応した血中高脂質保持の相関という、平地では想定もできなかった外部がもたらされると考えられる(Fig. 12 下段左図)。

さらに高地適応した人間が都市に住むという状況は、適応という時間の中では共時的な都市化・自然化を意味し、肯定的「都市化/自然化」アンチノミーをもたらす。この「都市化/自然化」トラウマが、通常では想定できない (ゆえに外部)、低栄養でも高血糖がみられるという現象が現れると考えられる(Fig. 12 下段右図)。

以上述べたように、「共生学宣言」にある論考は、一見わかりやすい共生 (少数派との共生) が認められない場合でも、全てが異質なものととの共存の可能性を問題にしており、明示的に述べてはいないものの、天然知能

図式におけるトラウマを、共生の核として取り上げていると読み解くことができる。

#### 4 議論および結言

共創学における共創と共生学における共生を比較すると、動機において明らかな違いが認められる。共創は、文字通り「創る」ことを問題としており、表現、制作、適応といった、いわば外部がうまく「やってくる」事例を扱っている。必ず成功体験を含む形で論じられるため、成功＝外部がやってきた、における存在様式を見いだすことができる。この意味で、共創において天然知能図式やその核の内在于するトラウマは見出し易い。

これに対して共生学では「創る」のではなく、直面している現実が扱われる。その多くは成功体験に至らず、発展途上のものもある。しかし論考の全てが、「わたし達」のような等質化による共存を回避しようと、注意深く議論を進めるため、異質なものととの共存という存在様式を問題としていることが鮮明になっている。この異質なもの同士 A, B の共存において、肯定的 A/B アンチノミーと否定的 A/B アンチノミーを共に満たす A/B トラウマを認めることができる。

本項でその詳細は述べでいないが、外部がやってくる(＝成功する) A/B トラウマは、否定的アンチノミーの度合いが強く、通常定義される A, B の文脈を脱色したトラウマになっている。そのことが想定外部との接続に関与している。対して共生に認められるトラウマは、この意味で脱色が進んでいない場合が多く、外部との接続が果たされるか否かわからない場合もある。逆に共創では、創れることが目的となる余り、異質なものととの共創が俎上に載せられないこともあり、創造に至らない場合も起こり得る。

以上より、共創学は異質なものととの共存に留意すべく共生学に学び、共生学は外部との接続を果たすべく共創学に学ぶことが必要かと思われる。このとき、両者の相互関係を結ぶ鍵が、天然知能であり、その核となる A/B トラウマであると考えられる。

#### 謝辞

本研究は、日本学術振興会/課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 (JPJS 00120351748)の助成を得て遂行されている。

#### 参考文献

Boden, M. (1998). Creativity and artificial intelligence, *Artificial Intelligence* 103,347-356.  
Boden, M. (2004). *The Creative Mind: Myth and mechanism*, Routledge, London and New York.

Duchamp, M. (1957). *Creative Act.*, <https://www.brainpickings.org/2012/08/23/the-creative-act-marcel-duchamp-1957/>  
Gunji, Y. -P., Takahashi, T. & Aono, M. (2004). Dynamical infomorphism: form of endo-perspective. *Chaos, Solitons & Fractals*, 22, 1077-1101.  
Gunji, Y. -P., Murakami, H., Niizato, T., Adamatzky, A., Nishiyama, Y., Enomoto, K., Toda, M., Moriyama, T., Matsui, T. and Iizuka, K. (2011). Embodied swarming based on back propagation through time shows water-crossing, hour glass and logic-gate behavior, *Advances in Artificial Life* (Lenaerts, T. et al. eds), 294-301.  
Gunji, Y-P, Murakami H, Tomaru, T. and Vasios, V. (2018). Inverse Bayesian inference in swarming behavior of soldier crabs, *Philosophical Transaction of the Royal Society A*, 376:20170370.  
Gunji, Y. P., Murakami, H., Niizato, T., Nishiyama, Y., Enomoto, K., Adamatzky, A., Toda, M., Moriyama, T. & Kawai, T. (2020). Robust swarm of Soldier crabs, *Mictyris guinotae*, based on mutual anticipation. In *Swarm Intelligence: From Social Bacteria to Human* (Schuman, A.) CRC Press, 62-89.  
Gunji, Y. P. and Nakamura, K. (2020). Dancing chief in the brain or consciousness as entanglement. *Foundations of Science* 25, 151-184.  
Gunji, Y-P, Kawai, T., Murakami, H., Tomaru, T., Minoura M., Shinohara S. (2021). Lévy walk in swarm models based on Bayesian and inverse Bayesian inference. *Computational and Structural Biotechnology Journal*, 19, 247-260.  
Kong, A., et al. (2012). Rate of de novo mutations and the importance of father's age to disease risk, *Nature*, 488(7412), 471-475.  
Murakami, H., Tomaru, T., Nishiyama, Y., Moriyama, T., Niizato, T. & Gunji, Y. P. (2014). Emergent runaway into an avoidance area in a swarm of soldier crabs. *PLoS ONE* 9(5), e97870, doi:10.1371/journal.pone.0097870.  
Murakami, H., Niizato, T., Gunji, Y. P. (2017). Emergence of a coherent and cohesive swarm based on mutual anticipation, *Scientific Reports*, 7, 46447.  
Nakamura, K. and Gunji, Y. P. (2020). Entanglement of art coefficient or creativity, *Foundations of Science*, 25, 247-257.  
Nakamura, K. (2021). De-creation in Japanese painting: Materialization of thoroughly passive attitude, *Philosophies*, 6(2), 35, doi:10.3390/philosophies6020035.  
アガンベン, ジョルジュ (2005). パートルビー偶然性について, (訳) 高桑和巳, 月曜社.  
渥美公秀 (2020). 共生のグループ・ダイナミクス, その技法, 「共生学宣言」(志水宏吉, 河森正人, 栗本英世, 檜垣立哉, モハーチ・ゲルゲイ編), 所収, 大阪大学出版会, pp.215-234.  
稲場圭信 (2020). 共生社会に向けての共創, 「共生学宣言」(前掲書), 193-214.  
植野貴志子 (2019). 会話におけるストーリーの共創. *共創学*, 1(1), 51-56.  
ヴァン・デア・コーク, ベッセル (2016). 身体はトラウマを記録する, 脳・心・体のつながりと回復の手法, (訳)柴田裕之, 紀伊国屋書店.  
柄谷行人 (1992). 探求I, 講談社学術文庫.  
河森正人 (2020). 「地域共生社会」の再検討, 「共生学宣言」(前掲書), 79-96.  
木村友美 (2020). フィールド栄養学からみた食と健康, 「共生学宣言」(前掲書), 97-120.  
久米是志 (2000). 共創と自他非分離心一創出の「こころ」の実践的・主観的考察, 清水博編著, 場と共創, 179-272.  
クリプキ, ソール (1983). ウィトゲンシュタインのパラドックス-規則・私的言語・他人の心-, 産業図書.  
栗本英世 (2020). 違和感, 不快感と不断の交渉, 「共生学宣言」(前掲書), 31-52.

- 郡司ペギオ幸夫 (2013). 群れは意識を持つ, PHP新書.
- 郡司ペギオ幸夫 (2019a). 天然知能, 講談社メチエ.
- 郡司ペギオ幸夫 (2019b). 共創=表現技法の意味論:「わたし」の内在と解体, 共創学, 1(1), 5-13.
- 郡司ペギオ幸夫 (2020a). クイズ番組のドラッグ・クィーン的解体, ユリイカ, 52(4), 232-241.
- 郡司ペギオ幸夫 (2020b). やってくる, 医学書院.
- ゲルゲイ, モハーチ (2020). 共に治す, 「共生学宣言」(前掲書), 275-294.
- 澤村信英 (2020). 国際的支援と住民の自助を再考する, 「共生学宣言」(前掲書), 171-192.
- 志水宏吉 (2020). 私たちが考える共生学, 「共生学宣言」(前掲書), 1-30.
- 諏訪正樹 (2016). 「こつ」と「スランプ」の研究 — 身体知の認知科学, 講談社メチエ.
- ゾートイ, マーカス(2020). レンブラントの身震い, (訳) 富永星, 新潮社.
- デリダ, ジャック(2003). 友愛のポリティクス, (訳) 鶴飼哲/大西雅一郎, みすず書房.
- 中村恭子, 郡司ペギオ幸夫 (2018). TANKURI:創造性を撃つ, 水声社.
- 中村恭子, 郡司ペギオ幸夫 (2020). 書き割り少女-脱創造への装置-, 共創学, 2(1), 1-12.
- 中村美亜 (2019). 芸術活動における共創の再考-創造とエンパワメントのつながりを探る-, 共創学, 1(1), 31-38.
- 永田鎮也 (2019). 超越動詞の誕生, 共創学, 1(1), 44-50.
- 西洋子, 三輪敬之 (2016). 被災地での共創表現と共振の深化 —このフィールドは、何を語りかけているのか—, アートミーツケア学会オンラインジャーナル, 7, 1-18.
- 西洋子 (2019). 共創するファシリテーションのダイナミックレイヤー, 共創学, 1(1), 13-22.
- 西島祐 (2020). 友と敵の脱構築-感情と偶然性の哲学試論-, 晃洋書房.
- 檜垣立哉 (2020). 「共生」の位相を巡る思想史, 「共生学宣言」(前掲書), 53-78.
- 藤目ゆき (2020). 戦時性暴力と地域女性史, 「共生学宣言」(前掲書), 121-140.
- ボヌイユ・クリストフ, フレソズ・ジャン=バティスト (2018). 人新世とは何か-<地球と人類の時代>の思想史-, (訳)野坂しおり, 青土社.
- 宮地尚子 (2018). 環状島=トラウマの地政学, みすず書房.
- 宮地尚子 (2020). トラウマにふれる, 金剛出版.
- 宮地尚子 (編) (2021). 環状島へようこそ. トラウマのポリフォニー, 日本評論社.
- 宮前良平 (2020). 死者との共同体, 「共生学宣言」(前掲書), 235-256.
- 三輪敬之 (2019). 共創表現のダイナミクス -実践, 理論, システム技術-, 共創学, 1(1), 23-30.
- Yamamoto, B.A. (2020). なぜ子どもたちが知らないままにいることを望むのか? 「共生学宣言」(前掲書), 141-170.
- 山崎吾郎 (2020). 消滅というリアリティに向き合う, 「共生学宣言」(前掲書), 257-274.
- レイコフ, ジョージ (1993). 認知意味論:言語からみた人間の心, (訳) 池上嘉彦/河上誓作, 紀伊国屋書店.
- 養老孟司 (2020). AIの壁, 人間の知性を問い直す, PHP新書.
- 世阿弥 (2005). 現代語訳:風姿花伝, (訳)水野聡, PHP研究所.